

特集

図書館ラーニングコモンズとは何か

石村 雄亮

横浜キャンパス図書館が1997年にオープンして以来、キャンパスの学術活動を長年支えてきたものの、大学での教育事情が変化していく中で、図書館の抜本的な改革をする必要が出てきた。他大学の多くが図書館ラーニングコモンズを整備しており、横浜キャンパスにおいても早急に整備をしなければならない。本稿では、図書館空間のデザインの変遷を振り返りながら、横浜キャンパスに求められるラーニングコモンズ像を明らかにし、どのような理念や思想でデザインをしていたのか解説する。

キーワード：ラーニングコモンズ、大学図書館、Learning commons, Academic libraries

1 はじめに：

ラーニングコモンズを取り巻く現状

横浜キャンパスに環境情報学部が1997年に開設して以来、図書館はキャンパスの学術活動を支える非常に重要な役割を果たしてきた。その一方で、大学における「学び」は時代と共に変化しており、大学図書館もその変化に対応しなければならない。新しい学習の場としての横浜キャンパスにラーニングコモンズを整備するにあたって、どのような理念や思想を持って整備していったのか本稿では解説をしていきたい。

近年、新しい学びの形を実現するための方法として、大学図書館におけるラーニングコモンズの整備が年々進んでいる。文部科学省が行った調査によると国公私立769大学から教育内容等の改革状況における回答があり、62.7%もの大学がラーニングコモンズを整備・活用している。2011年度調査では33.9%であることから、日本の大学においてラーニングコモンズが標準化しているようである^[1]。例えば、同志社大学では学生の交流と相互啓発を目的としているクリエイティブコモンズとアカデミックスキルを身につけるリサーチコモンズから構成される2,550m²のスペースを使った日本最大級のラーニングコモンズを2013年にオープンしている^[2]。本学世田谷キャンパスにおいても、2015年春にラーニングコモンズがオープンし、学生達が集まり、協働して学べる図書館に生まれ変わった^[3]。このように多くの大学において、ラーニングコモンズが当たり前になってきている一方で、国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会はラーニングコモンズとは何かと

いう本質的な議論や目的・意義といった理解が共有されておらず、とりあえずインフラとしてラーニングコモンズを導入している傾向が強いと報告している^[4]。横浜キャンパスにラーニングコモンズを整備するにあたって、インフラありきでなくどのような「場」にしていくべきなのか目的を明らかにする必要がある。

2 図書館とラーニングコモンズ：歴史的背景

大学図書館がラーニングコモンズに変貌しているが、そもそも大学図書館とは何だろうか。藤野他は図書館を字義どおりに解釈すると書物を所蔵した施設となるが、蔵書が存在するだけでは図書館にはならないと述べている。図書館とはただ単に所蔵されている資料を貸すだけの「無料貸本屋」ではない。大学図書館は学部・学科の教育研究活動をサポートするための文献や学術雑誌が質・量とも求められる。さらには、図書館を構成する3要素（図書館資料、施設・設備、及び図書館職員）と利用者を足した4要素によって図書館が成り立っているのである^[5]。この4要素は図書館を構成する重要な要素であるが、時代の変遷と共に要素の解釈の仕方が変化していったともいえる。例えば、Bennettは図書館空間のデザインの変遷をreader-centered paradigm（読者中心パラダイム）、book-centered paradigm（書籍中心パラダイム）、information technology and the end of the book-centered paradigm（情報化と書籍中心の終焉パラダイム）、そしてlearning-centered paradigm（学習中心パラダイム）の4つのパラダイムから解説を試みている^[6]。彼によると、20世紀初頭における大学図書館は、修道院の写本室や図書館に起源を発する読者中心という考え方があった。読者と書籍との関係がすぐ隣にあるということが最も重要であり、学部図書館とい

う考え方にも表れている。教員のオフィスや教室から最短距離に書籍や学術誌があるべきであるという考えだ。20 世紀中盤からは、コレクションの増大により研究型大学をはじめとする多くの大学が図書館は書籍のためのスペースであると考え始めたのである。つまり、利用者よりも物理的なスペースに焦点が当てられている。20 世紀の後半になってくると、オンライン資料の出現により物理的スペースに余裕が出てきたことから、学生の学習スペースとしての図書館にシフトしていく。その流れを受けて、最後のパラダイムとして再び利用者に焦点が当てられ、インフォメーションコモنزに見られるように今までの図書館におけるサービスに IT 技術を融合するという考えが出てきた。それだけではなく、学習の「場」としての図書館スペースという考え方も生まれた。つまり、図書館スペースは学習者が自身の学習に対して責任を負う場所として存在すべきで、深い学習としての意図的学習を促すスペースなのであると Bennett は述べている。Turner et al. も大学における学習に対する考え方が図書館を変えたと指摘している。高等教育が従来の教師主導の考え方から、より柔軟な学習者中心のアプローチにシフトし、学習者としての学生は単に情報の消費者というだけでなく、能動的に意味のある知識や知恵としていく必要があり、学習の場としての図書館に対する考え方に変化したと述べている [7]。

学習は何も一人だけで行うものではない。Bennett はラーニングコモنزとは、授業における様々なタスクといったフォーマルな学習に関して学生同士を結び付けることが出来る場であるし、インフォーマルな場として学生たちの興味関心を共有する場でもあると述べている。ラーニングコモنزの核となる活動は、単に情報を取り扱ったり得たりするだけではなく、学生同士の協働学習を通して、情報から知識さらには知恵を創出することである [8]。つまりは、Bailey and Tierney が指摘するように大学図書館は “student success” つまりは学生が大学生活において学業的成功を収めるために協働してリソースやサービスを提供していかなければならない。このような背景から、ラーニングコモنزとは図書館の領域外の機能（例：学習相談やライティングサポート）をも図書館内に融合していったのである [9]。

3 横浜キャンパス図書館のラーニングコモنزの設計に当たって

前述の通り、ラーニングコモنزとはただ単に場所として存在するのではなく、学習の場として設計する必要がある、図書館においてどのような学習を実現したいのか具体的にしなければならない。先行研究や筆者自身の経験から、横浜キャンパスのラーニングコモنزとは、自発的な学習や協働学習を実現する「場」を目指した。もう

少し具体的に解説すると、ラーニングコモنزでは：1) 本だけでなく様々な情報を利用しながら学習する場、2) 学生同士の協働学習を促進する場、3) 学生自らが考えた色々な形の学習がサポート・実現できる場、そして 4) 学習に必要なサポートが受けられるような場であって欲しいと考えた。

国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会はラーニングコモنزとは 3 つの要素（物理的リソース、アカデミックリソース、及び人的リソース）から成り立っていると解説している。物理的要素つまりは場所として多様な学習活動をサポートできるようなフロアプランであったり、ICT 設備、協働学習を可能にするような設備や什器の導入がされなければならない。アカデミックリソースは文献データベースや OPAC、書籍といった学習活動に必要な不可欠なものである。人的リソースは従来のレファレンスサービスに加え、ライティング支援や情報リテラシー関連講習といった多様な学習をサポートする体制である [4]。この 3 要素をベースに、他大学の取り組みを参考にしながら案を練っていった。

まず 1F のメインエリアであるが、従来の書架ありきのレイアウトではなく、図 1 のように開放感のあるスペースを作りたいと考えた。あえてパーティションで仕切ることとはせず、オープンにすることで開放的な印象を与えると共に、他の学生が何をやっているのか見えるようにすることで、お互いに良い刺激を与えて欲しいからである。また、従来の横浜キャンパス図書館では声を出してはいけなかったが、活発な意見交換を通してお互いが学ぶことで学習効果を高めることができることから、机については可動式のものを配置することによって自由にレイアウトを変えるようにしたいと考えた。図 2 のように学生の自由な発想でレイアウトを変えられ、個人での利用から複数人での利用、またプロジェクターに



図 1 マクマスター大学図書館ラーニングコモنز

Note. Ron Scheffler. McMaster University Library CC BY-SA 2.0 Retrieved from https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Learning_Commons_in_Mills_Memorial_Library_at_McMaster_University.jpg

パソコン画面を投影することで大人数に対してのレクチャーに対応できるスペースを目指した。

図3のようにグループ作業に特化したスペースというのをもえて加えたいと考えた。学生視点で考えたときに、グループで使うものだと視覚的に訴えることで、グループでの協同作業を促進するためだ。このようなグループスペースはプロジェクターや外部モニターといったIT機器をうまく融合させることで、ノートパソコンを使いながらお互いに画面を見ながら作業ができる場にするすることで、アナログでない学習の形に誘導することも意識した。

その他にも視聴覚教材を利用できるエリアやノートパソコンを自由に借りることが出来るロッカー、単焦点プロジェクターを壁面ホワイトボードに投影することで、ブレインストーミングなどに使えるスペースなどIT



図2 東北学院大学ラーニングコモンズ

Note. Hinayoshi. 東北学院大学ラーニングコモンズ「コラトリエ」
CC BY-SA 4.0 Retrieved from <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:可動機コンビニ席.jpg>



図3 マギル大学図書館 Cybertheque

Note. Klaus Fiedler. McGill University Cybertheque. CC BY-SA 3.0 Retrieved from https://commons.wikimedia.org/wiki/File:McGill_University_Library_Cybertheque.jpg

機器との積極的な融合も目指した。

従来の図書館との違いを出す上でも、また学習者中心の教育を実現する上でも学習サポートを提供するスペースを作るべきだと考えた。大学での教育改革が進む中、学生の自発的な学習に重点が置かれるようになり、大学での学習で成功を取るためにも学習をサポートする場とサービスは欠かすことはできない。図4で示されるように、図書館に入ってきてすぐに学習サポートが受けられることが分かるようなスペースを作ることで、図書館利用者に対して学習サポートを受ける場であるとの印象を与えると共に、大学での学習は単に知識の詰め込みではないというシグナルを出したいからである。

1Fが「動」の学習を実現できるスペースに志向しているの、2Fについては逆に「静」の空間を目指した。こちらは従来の図書館スペースのイメージの延長線上にあり、個人用のブースや机にパーティションを導入することで、他人からの視線を気にせずに静かに勉強や作業ができるような空間が必要である。

4 まとめ

大学での学びが教員中心から学習者中心へシフトしており、学習の場としての図書館もこの変化に柔軟に対応する必要がある。多くの大学が図書館ラーニングコモンズを整備しており、物理的スペースとしてのラーニングコモンズを考えてしまいがちだが、まずどのような学びを学生にして欲しいのかということを明確にし、その学びをどのようにサポートしていくべきなのかを考えてラーニングコモンズを整備をしていく必要がある。横浜キャンパス図書館では、様々な形の自発的な学習ができるようなスペースを実現するという理念のもとにデ



図4 ヨーク大学ラーニングコモンズ

Note. Raysonho. York University Learning Commons. CC0 Retrieved from <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ScottLibraryLearningCommons.jpg>

ザインをまとめていった。

参考文献

- [1] 文部科学省：大学における教育内容等の改革状況について（平成 27 年度）2015. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf
- [2] カレントアウェアネス・ポータル：同志社大学, 日本最大級のラーニング・コモンズをオープン 2013. <http://current.ndl.go.jp/node/23230>
- [3] 東京都市大学：ラーニング・コモンズについて n.d. <https://www.tcu.ac.jp/facilities/facility1/learning-commons/>.
- [4] 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会：ラーニング・コモンズの在り方に関する提言：実践事例普遍化小委員会報告 2015. <https://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503a.pdf>
- [5] 藤野幸雄, 荒岡興太郎, 山本順一：図書館情報学入門. 2nd ed. 有斐閣, 2000.
- [6] Bennett, S.: “Libraries and learning: A history of paradigm change1,” Portal: Libraries and the Academy, Vol.9, No.2, pp. 181–197, 2009
- [7] Turner, A., Welch, B., Reynolds, S.: “Learning spaces in academic libraries: A review of the evolving trends,” Australian Academic and Research Libraries, Vol.44, No.4, pp. 226–234, 2013
- [8] Bennett, S.: Libraries designed for learning 2003. <https://www.clir.org/wp-content/uploads/sites/6/pub122web.pdf>
- [9] Bailey, D. R., Tierney, B.: Transforming library service through information commons: Case studies for the digital age. American Library Association, 2008